

カボチャ (ウリ科)

肥料を吸収する力が強いので、基肥のやりすぎに注意する。連作のできる代表的な野菜。

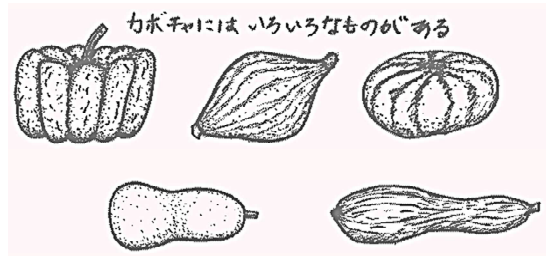
作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
露地移植栽培			保温 播種		トンネル 定植		収穫						
露地直播栽培													
露地抑制栽培													

1) 適地

軽い土のところ適していますが、やせ地などでも排水がよければ充分生育する、あまり土壌を選ばなくてもよい野菜です。また、連作することも可能です。

2) 品種

カボチャは大きく西洋カボチャと日本カボチャに分けられます。普段よく食べているのは大半が西洋カボチャで「栗カボチャ」とも呼ばれています。その他にも、オモチャカボチャ、ズッキーニといったペポ種や西洋カボチャと日本カボチャをかけあわせたもの（鉄かぶとなど）がありますが、ここでは扱わないことにします。



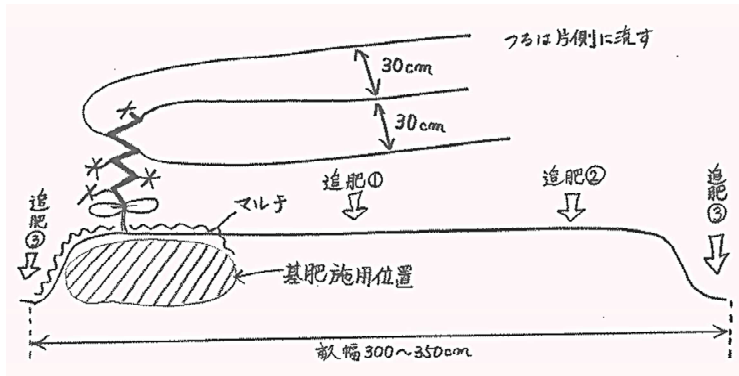
西洋カボチャ：えびす、ほっこり133、くりゆたか、坊ちゃん

日本カボチャ：近成芳香、鹿ヶ谷

3) 作り方

【圃場の準備】定植の1か月前に1m²当たり堆肥2kgと苦土石灰100~150gを施用し耕しておきます。定植または播種の1週間前に、幅300~350cmの畝を立て、畝端の幅1mくらいの部分に高度化成肥料を1m²当たり80g施用してマルチを張ります。

【播種・定植】移植栽培では、定植日より逆算して概ね30~40日前に9cmポットに1粒ずつ種を播いて保温・加温できる場所で育苗します。直播の場合は4月下旬~5月上旬に播種します。移植栽培、直播栽培のいずれも株間は90cmとします。4月下旬頃までに定植する移植栽培では、定植後にビニールトンネルや不織布のベタがけにより



保温と風よけをします。次第に暖くなる時期ですので、ビニールトンネルの場合は穴あけをして換気します。不織布の場合、穴あけは不要です。トンネルやベタがけは、



肥料袋の行燈



不織布のベタがけ

つるが勢いよく伸びだす時期を見計らって取り除きます。

【追肥】1回当たり本圃面積に換算して1m²当たり高度化成肥料30gを施用します。1回目は1番果の着果を確認した頃につる先付近に、2回目は2番果の着果を確認した頃に畝間に施用します。また、3回目は梅雨明け直前に畝間に施用します。追肥を確実に施用し、着花後～盛夏期の草勢を強く保つようにしてください。

【中耕】雑草や雨で土の表面が固く締まるのを防ぐために、1回目の追肥後中耕して根の張りをよくします。

【整枝】親づるを本葉5～6枚で摘芯し、伸びてきた子づるのうち元気のよいものを3本残して片側整枝にします。1番果の着果節までの孫づるは早目にとり除き、その後は放任します。

【管理】1回目の追肥が終わる頃から、雑草防止、乾燥防止、つるの固定を目的として畝の上に敷きワラをします。天候不順などで訪花昆虫が少ないときは、人工交配すると着果がよくなります。交配は晴天日の午前中にします。株元近くに着果する果実は形が悪くなる傾向がありますが、天候の具合でそれ以降の着果が困難になることも多いので、摘果せず残します。果実の色づきをよくするため、着果後果実が肥大し、やや果皮色が濃くなるのを待って、カボチャ専用のマットを敷きます。このとき、果実の姿勢は直さなくてかまいません。なお、マット敷きが早すぎると、手で触れた刺激で生理落果しやすくなるので注意が必要です。



マット敷き後



日焼けした果実

【収穫】開花後、西洋カボチャは約40日、日本カボチャでは約30日で完熟となります。若どりは避け、果皮の光沢がなくなって表面に小じわができ、果梗部が十分コルク化したものから順次収穫します。貯蔵する場合は、風通しのよい、涼しいところにおいておきます。

4) 病虫害防除

生育期間を通してうどんこ病が多発するので、10～14日おきに防除することが必要です。特に、盛夏期を迎えるころには果実の日焼けを防止するためにも、うどんこ病の防除は欠かせません。その他、アブラムシ類やアザミウマ類なども発生するので、定期的に観察して発生を確認したら防除します。